

【乾季の恐怖】

ウガンダには乾季と雨季という2つのシーズンがあります。雨季は長くて激しい大雨季とそれほど雨は降らない小雨季という2つの雨季が、それぞれ乾季を挟んであるといわれたりします。雨季の雨はまさに恵みの雨で、そのおかげでウガンダは緑に溢れ、1年を通して多くの野菜や果物、そして主食の一つであるマケ(甘くないバナナ)などを育ててくれます。しかし、問題は乾季です。特に大雨季は3か月近くまともな雨が降らないこともあります。9割以上が放牧酪農を行っているムバララでは大変重要な問題です。放牧地によっては水へのアクセスが一か所しかなかったり、その一か所の小さいダムが干上がってしまうこともあります。もちろん、放牧地によってはまともな草がほとんどないことも多々あります。なので、ここウガンダでもサイレージを作っている農家がちらほらあり、乾季の重要な飼料になります。



私が訪れたある農家では乾季の水不足が原因で10頭近く牛が死んでしまったという話も聞きました。その農家にとっては約3分の1の搾乳牛がいなくなったこととなります。さらに悪いことにその中には唯一の雄牛も含まれ、本交を主体にしていたこの農家では新たに雄牛を買う余裕はなく、約半年も新規のタネつけができていません。農村部の多くの家では自分の家にある大きな貯水タンク(もちろん雨をためる)から生活用水を得て

るので、酪農家の自宅にさえ十分な水が乾季にはありません。こうした状況を打破しようと様々なプロジェクトが入っていますが、現状は依然として厳しいままです。残念ながらプロジェクトでは直接この問題に対処はできませんが、サイレージや灌漑工事の提案、人工授精の可能性などを訪問時に農家に話しています。

**【安定しない乳価】**

日本の乳価は多少の差はあれど、基本的に1年を通して安定していると思います。ここムバララでは乳価は地域や仲介人によって大きく異なり、また雨季と乾季で2倍以上価格に差があることもあります。これは安定した酪農経営を行う上で大きな障害となっています。酪農組合をつくり、そこで一元集荷をしている所でさえ、その乳価は農場によってことなります。乳成分などは調べていないので、単純なリッター換算で集荷されています。



ある農家ではボダボダと呼ばれるバイクタクシーが毎朝農場に来て、その場で牛乳を買い取ります。ボダボダのおじさんはそのあとに各店舗や食堂、ホテルなどに直接売りに行って自分の利益を出します。農家によってはタンクローリーなど入っていけませんし、自家用車を持っていなかったりもするので、まだ集荷システムなどきちんと確立されていないウガンダではこのような仲介人が牛乳の集荷に重要な役割を果たしています。しかし、中には水で薄めて、言葉通り水増ししたりする人もいます…。